太陽がただ南より―新島襄の祈り―

中村　信博 〔なかむら・のぶひろ〕	同志社女子大学学芸学部教授

学生時代のこと

ただいまご紹介をいただきました同志社女子大学の中村信博と申します。二〇〇八年度秋学期のDoshisha Spirit Week にお招きをいただき、しばらくの時間をいただいて、みなさんとともに同志社建学の精神を思い起こしながら、お話をする機会を与えていただきましたことを感謝いたしますとともに、心から光栄に思っております。

きょうは、お配りいたしましたハンドアウトに沿ってお話しをするつもりですが、そこに、引用いたします同志社の創立者新島襄の言葉、あるいは聖書の言葉を中心に書き写しております。口頭で申しあげただけではわかりにくいかと思いますので、必要に応じてご参照いただきますようにお願いいたします。

いままで、意識して振り返ったことはありませんでしたが、改めて考えてみますと、私は、学生時代から今日まで、途中で数年間ほど同志社を離れていた時期がありますけれども、およそ三十年近くを同志社で学び、同志社を職場として、この同志社で過ごしてきたことになります。いつの間に・・・、というのが偽らざる実感でございます。

私は一九七四年に同志社大学神学部に入学いたしました。それは、同志社創立九九年目の年で、その翌年、一九七五年に同志社は創立一〇〇周年を迎えました。そのころ、一〇〇年という歴史、伝統ということを私はあまり意識したことはなかったように思います。学生として、もちろんそういうことは知っておりましたけれども、当時は記念の行事については、あまり学生たちには知らされていなかったような気がいたします。法人、つまり同志社全体としては盛大な記念式典がありましたが、こうしたSpirit Week もありませんでしたし、学生が一〇〇年を意識するような催しはあまりなかったのではないでしょうか。

同級生はちょうど二十名でした。当時、神学部は各学年十～二十名程度の在籍者で、上の学年は在籍者が一桁という年もありまして、大学院の学生まで含めても、一〇〇名を越える程度の学生数しかありませんでした。同志社大学は、その頃すでに、全体で二万人ほどの学生が学ぶ大きな大学でしたから、そのなかで、二十人とか一〇〇人という数は、ほんとうに例外的な少人数の学部であったということになるかもしれません。いまは、その頃の三～四倍ぐらいのみなさんが神学部に学んでおられると伺っています。

非常に人数が少ない学部に学ぶ機会を与えていただきましたことで、ずいぶんといろいろな面で恵まれていたような気がいたします。先生方はすぐに名前を覚えてくださいました。授業も平均して数名のものがほとんどで、毎回がゼミのような雰囲気でありました。同級生どころか前後の学年の方たちとも学年を越えて親しくさせていただくことができました。その頃の神学部には、ひょっとしていまも同じかもしれませんが、よその大学を卒業してから来られたり、いったん社会に出てから編入学された方たちも多くて、学年が同じとか違うということよりも、そうした年齢や社会経験、人生経験の異なる友人たちから得た刺激は、とても多かったように思います。いまも、そうした先輩や友人たちとはながく連絡をとり合っていますが、この大学では、ほんとうに貴重な経験をさせていただきました。

あとで、すこしお話することになるかと思いますが、私は同志社を卒業したあと、しばらく東京の教会で伝道師・牧師として過ごしました。そして、今度は女子大学の教員として、再び同志社のお世話になることになったのですが、私が教員として戻ってまいりましたのは、一九八六年、つまり大学や女子大学が京田辺キャンパスを開学した年のことでありました。その同じ年に、やはり同じように同志社女子大学に赴任されたひとりの先生が、（この方も同志社大学と大学院でながく学ばれた方でありましたが）あるところでこんなことをおっしゃったことがありました。

その先生は学生のころ、同志社と言えば、ご自分が学んでおられた学部のことしか考えてこなかったとおっしゃったのです。その学部こそが、同志社そのものであって、他の学部や、まして女子大学のことなどを意識したことはなかったそうです。しかし、こうして女子大学に教員として勤め始めてみると、女子大学にも長い歴史があって、建学の理念を共有しながら、いっぽうで独自の歩みをしてきたことがよくわかってきて、改めて、同志社の広さと言いますか、自分が学生時代には学生としての視野の狭さもあって、意識しなかったところに、きちんと同志社の歴史と伝統が大学以上にと言うと語弊があるかもしれませんが、とても大切にされてきたことを知って感激しています、とおよそこのような感想を述べられたことがあったのです。

じつは、この先生の感想を伺って、そのとき、私も同じだと思いました。私は神学部という学生の少ない小さな学部に学びましたが、キリスト教の神学を学んでまいりました者にとりましては、同志社といえば、それは神学部のことでした。それまで、それ以外の同志社のこと、他の学部や女子大学あるいは高校や中学、当時もちろん小学校はありませんでしたが、くわえて幼稚園のことなども考える必要のないような生活をしてきたことに改めて気づかされたような気がしたものでございました。

いまは、まったく逆でございまして、ご一緒に女子大学に赴任された先生がおっしゃったように、女子大の長い歴史や伝統にむしろ私自身が育てられながら、同時に、同志社のなかの他の学校との強い繋がりや連帯の意識に支えられたり、励まされたりして過ごしております。

太陽がただ南より

さて、前置きはこれくらいにいたします。きょう私は、主題を「太陽がただ南より」とし、副題には「新島襄の祈り」といたしました。きょうは、同志社科目の「キリスト教とは何か」という授業のなかで時間をいただいているわけでありますが、いま申しましたように、私自身の同志社とのかかわりといいますか、私自身がこれまでの拙い人生のなかで、励まされたり、慰められたり、指針のようなものを与えられてきたことをお話しさせていただきたいと思います。そして、体系的あるいは学問的な講義というよりも、むしろ体験的に私自身が感じ、理解してきた同志社建学の精神、私はきょうそれを「新島襄の祈り」という言葉で表現しておきたいのですけれども、すこし自由にお話をさせていただいて、そこから、みなさんにも建学の精神としてのキリスト教、あるいは、新島を支えたキリスト教について考えていただく機会になれば、と願っております。

ところで主題といたしました「太陽がただ南より」という言葉は、新島襄の書簡集を出典としております。『新島襄全集』（以下『全集』）では第三巻と第四巻とに邦文の「書簡（手紙）」が収集されていますけれども、その終わり近く、『全集』では「815」という通し番号になっている手紙がございます。「太陽がただ南より」と申しますのは、療養先の神奈川県大磯の百足屋という旅館から、京都の八重夫人に宛てて書かれた手紙のなかにある一節でございます。日付は一八九〇（明治二十三）年一月十七日となっています。新島はその六日後に、この旅館で息を引き取ることになるのですから、この手紙は、いわば新島が死の直前に書いた、ほぼ絶筆とも呼ぶべき手紙でありました。『全集』には、書かれた年代がはっきりしない手紙を除けば、この手紙の後に書かれたものが他に三通が収録されています。そのうちの一通はやはり八重夫人宛のものですが、二〇〇五年に岩波文庫版で出版されました『新島襄の手紙』（二〇〇五年、以下『手紙』）では、そこに収められた九十六通の手紙の最後になっています。

その手紙は、「今日こそあなた（八重夫人）からの手紙が届くだろうかとずっと待っていたけれども、夕方になってやっと届いて、読むことができた」という率直な書き出しで始まっておりまして、京都で自分が留守をしているのに、誕生祝いをしてくれたことを知って、喜んだこと、そして療養先の旅館のようすなど報告したもので、ユーモアのある文面に新島の人柄と優しさとを読み取ることができる手紙であります。「太陽がただ南より」という言葉は、その手紙の追伸といいますか、欄外に書かれた、

米国より参り候菊苗の上にシッカリわらをかぶせ、寒気のために傷まぬようなし下されたく候。太陽がただ南よりあたるような、しおき下されたく候。
（『手紙』No.96）

という一文からとらせていただいたものでございます。

八重夫人は、この三日後、一月二十日には大磯に駆けつけて、何人かの教え子たちとともに新島の最期を看取ることになるのですが、このことはあとでもまた触れることになるかと思います。私は、病の床に伏して八重夫人に書き送ったほぼ絶筆に近い手紙のなかで、アメリカから送られてきた菊苗のことを心配し、一月のことですから、寒さで枯れてしまわないようにと、その菊の苗に「太陽がただ南より」あたるようにしておいて欲しいと書いている新島に、なんだかとても心揺さぶられるような気持ちになるのでございます。一言ではとてもうまく言い表すことはできませんけれども、私自身がこの三十年近く、いえ、入学してから途中離れていた数年の時期も加えますと、三十数年の間におりに触れ、考え、感じてきた同志社の精神は、まさにこの「太陽がただ南より」あたるように、いつもそんな配慮を感じつづけることができたような気がしてならないのです。それは、具体的にはお世話になった先生方のご配慮であり、また、友人たちや先輩たちのあたたかさでありました。「太陽がただ南より」あたるようにしておいて欲しい、それは、新島が同志社と同志社の生徒・学生たちに寄せた切なる祈りではなかったかと思うのです。そしてそれは、直接に新島を知らない私ども卒業生、そして何よりも、いま同志社に学んでおられるみなさん方に、この同志社が、新島以来ずっと願いつづけてきた祈りでもあるのではないかと思えてならないのです。

新島は、その前年と申しましても、わずか二ヵ月ほど前のことになりますが、一八八九（明治二十二）年十一月二十三日付けの横田安止（やすただ）という学生に宛てた手紙を書いています。横田は、当時同志社英学校の五年生でした。横田は学生ではありましたけれども、新島は何度も彼に信頼厚い手紙を書いています。大磯での転地療養にと繋がる群馬県前橋で倒れる直前に、関東地方で募金活動に奔走していたときのことでした。この手紙には、のちに同志社教育の精神的主柱ともなった良心碑に刻まれたあの有名な「（ますます）良心の全身に充満したる丈夫の起こり来たらん事を（望んで止まざるなり）」の一文が書かれていたことでよく知られた手紙です。「良心碑」のこともあとで触れたいと思っています。その一文をもってあまりにも有名なひとりの学生に宛てた手紙のなかで新島は、

また留守中、同志社の内部は十分にご尽力下され、たとい区々の規則これ有り候とも、生徒中、藹然として自由自治の春風、吹き居り候よう仕りたく候。
（『手紙』No.88）

と印象深く書き伝えているのです。つまり、「私が留守中は、同志社の学生同士、様々な規則などはあるが、なごやかな自由自治の精神が春風のようにおだやかに吹くようにしていて欲しい」というのです。「太陽がただ南より」と願った新島が理想としたのは、春風のように、爽やかな風が吹き抜けて、自由でけっして強制されたものではなく、自らの責任で自分

を治め、自らを律することのできる精神であったのでありました。新島はひとりの学生に、同志社はそういう学校であって欲しいと願ったのでした。いえ、新島はひとりひとりの学生を大切にしたからこそ、ひとりの学生に同志社の理想を託したのかもしれません。

甲斐和里子の場合

ところで、「自由自治の春風」や「太陽がただ南より」という思いは、ひとり創立者新島だけのものではありませんでした。私は女子大学に勤めておりますので、女子大学あるいは女子中学高等学校のルーツである同志社女学校にも、こんなエピソードが残されておりますことを、ご紹介したいと思います。

一八九三（明治二十六）年のことでした。それは新島が亡くなってまだ三年、しかし、いっぽうで同志社女学校が誕生してすでに十六年の時間が経過した年のことでございました。その年、ひとりの若い女性がこの学校に入学したいという気持ちを胸に秘めながら、御所の庭を行ったり来たりしていました。今出川通を隔てて、そこには同志社女学校があります。この女性は、同志社で英語を勉強して教師になろうと決めていました。しかし、彼女はある理由によって、同志社女学校への入学は無理ではないかと諦めかけていたのです。その理由とは、同志社女学校がキリスト教を学校の精神として大切にしていたことにありました。彼女は、広島県の仏教の僧侶の家庭に生まれた仏教信者であったからであります。それでも、京都で女性が英語を学ぶにはこの学校しかないと、御所の置き石に腰をおろして、彼女は揺れる気持ちを押さえきれずにいたといいます。しばらくして、このひとは「勇気を出して、学校にお願いしてみよう」と決意をいたします。そして、御所を走り抜け、今出川通を横切って、同志社女学校の門をくぐりました。彼女の名前は、甲斐和里子といいます。彼女は、自分の事情を打ち明け、「クリスチャンにはなれませんですが、それでもよければ入学させてください」と懇願いたしました。その高い向学心と情熱に打たれた学校側の松浦政泰教頭は、「あなたが居づらくなければどうぞ」と、むしろ彼女の気持ちを気遣ったといいます。彼女は、入学してからは、英語の勉強だけではなく、聖書やキリスト教を学ぶ時間にも熱心でありました。教師たちも、このひとが僧侶の家庭に育ったことをよく理解したうえで、ごく自然に愛と温もりのある指導をしたそうです。

甲斐和里子は、のちに夫とともに、京都女子中学・高等学校、さらに京都女子大学を擁する仏教系の京都女子学園を創立いたしました。今日、仏教系の女子大学として高い評価がある京都女子大学は同志社女学校のひとりの卒業生、正確には同志社女学校専門科を中退をなさった方でありますが、そのひとによって種が蒔れ、その尽力と祈りによって建てられた学校でありました。彼女はのちに、当時の松浦教頭が、彼女がクラスのなかでとけ込んでいく姿を「キリスト教の神（ゴッド）と仏教のお釈迦様（ブッダ）とが握手をなさったようだ」と語ったことを何度も思い返して、周囲の人びとに語りました。（籠谷眞智子『甲斐和里子の生涯』自照社出版、二〇〇二年、三二～四九ページ、および佐藤八寿子『ミッション・スクール　あこがれの園』中公新書　二〇〇六年、一八～二〇ページを参照）。

このエピソードは、創立者新島が抱いた理想が、同志社英学校のみならず、同志社女学校にも脈々と流れ、受けつがれていたことを物語っています。キリスト教主義を建学の理念として掲げながら、仏教者でありつづけることを公言した若い女性を、かえって居づらくないようにと配慮をしながら、他の学生と変わらないように迎えた同志社女学校は、南からあたる太陽の陽射しが穏やかで、まぶしいほどであったに違いありません。そこにもまた、いつも爽やかな春風が吹いていたことだろうと想像いたします。

良心碑

私はよく、同志社のキリスト教主義とは何かと考えてみることがございます。もちろん、なんど考えてみても、明快に答えることはできないのですけれども、ひとつのヒントは、いま申しましたように、「仏教とキリスト教とが握手をしたようだった」という当時の教頭の言葉を思い出しながら、甲斐和里子が述懐した同志社女学校の対応の仕方、判断の仕方、教育のあり方のなかに隠されているような気がしてなりません。それは、異なる立場の者や、異なる考え方をするひとを排除するのではなく、むしろ、そのひとが困らないように優しく、包み込んで受け入れる精神であるのではないかという気がするのです。

その考え方は、どのようにして新島のなかで育ち、同志社の建学の精神として共有され、受け入れられ、受けつがれていったのでしょうか。これも、いろいろな解釈が可能であろうかと思いますが、きょう私はやはり、さきほど申しました新島が同志社の学生であった横田安止に宛てて書いた手紙のあの有名な一節、すなわち「ますます良心の全身に充満したる丈夫の起こり来たらん事を望んで止まざるなり」という、新島の祈りにも似た願いが記された一文を手がかりに考えてみたいと思うのです。

新島は、なぜこのとき「《キリスト教》が全身に充満したる丈夫の起こり来たらん事を」と書かなかったのでしょうか。キリスト教主義による大学の設立を畢生の大事業とした新島であったならば、良心ではなくキリスト教が充満した、と書いてもおかしくはありません。それをあえて「良心の」と書いているところに、私は、同志社におけるキリスト教、あるいはキリスト教主義ということを理解する、とても重要な鍵が隠されているのではないかと考えています。

新島は、卒業生に「一国の良心」とも呼べる人間として育って欲しいと願い続けました。そして、いまお話している「良心の全身に充満したる丈夫の起こり来たらん事を」という一文は、今出川キャンパスでも京田辺キャンパスでも同志社大学の正門に石碑が建てられておりますし、同志社の関係者はそれを「良心碑」と呼んで親しみ、同時に、新島の精神をいつも身近に感じてきたのでありました。ですから、この「良心」という言葉、そして、それがなぜ「キリスト教」ではなかったのかということも含めて、これまで、多くの解釈がなされてきたことも事実です。

私たちは、一般に「良心」という言葉を使うことで何を表そうとするでしょうか。よくそれは「魂の内なる声」というような意味で使われているかもしれません。たとえば、「それはあなたの良心に恥じませんか」とか、「良心に誓いますか」といった言い方をいたします。あるいは「良心の呵責」などという言葉もありますから、たしかに良心を嘘偽らない自分の真実、あるいは自分の魂であるとか、何人によっても冒し歪められることのない信念のことだ、と解釈することはけっして間違いであるとは言えません。しかし、そうだといたしますと、新島は同志社には自分の正しさを主張し、固執する若者、信念と言えば聞こえはいいかもしれませんけれども、すこし意地悪く言えば、他人の声など無視して自分だけが正しいと主張できるような頑固な若者たちに学んで欲しい、と考えたことになってしまうのではないでしょうか。

もしそうであるとしたら、宗教家でもあった新島が、わざわざ近代日本の黎明期に、高等教育機関としての大学を建設しようとしたことのほんとうの意味はいったいどこにあったのでしょうか。もし、良心という言葉を用いることによって、キリスト教の信念という意味を示したかったのならば、なぜ新島は、キリスト教や教会の世界に自分の活動を限定しなかったのでしょうか。

よく同志社では「キリスト教がわかりにくい」とか、「キリスト教が大切にされていない」というご批判の声を耳にすることがあります。私はこういう声があることを大変に残念に思っています。わかりにくかったり、大切にされていないのではなくて、同志社では、新島が「良心」という言葉を使ったことから、キリスト教は形式や表面的なものではなく、むしろ隠し味といいますか、精神の深いところにかかわるものとしての性格を強く帯びるようになっていったのではないかと私は考えております。同志社では、君臨し支配するようなキリスト教ではなく、むしろ多様な学生や教職員、ひとりひとりの個性や才能に、南から太陽が照って、それをのびやかに育てるような役割を担ってきたのではないかと考えてみるのです。新島は、自分の頑固な信念を実現する場所ではなくて、自分の信念さえも超越したもっと大きな真理を学び、その真理の前に恐れを抱くような謙遜で、ひとを支配するのではなく、のびやかな人格をこの同志社において育てたい、養成したいと願ったのではないかと思うのです。

じつは、良心という言葉は、ご存じのように英語ではconscience といいますが、本来はラテン語のconscientia を語源とする言葉であるといわれています。それは、共にとか、一緒に、あるいは共通のという意味のcon という接頭辞に、認識・知識・感覚、あるいは科学（science）の語源とされるscientia という語が合成されて生まれた言葉でございます。むしろ、語源を辿りますと、良心とは、信念や自己正当化とは、真逆に位置するような共通認識とか共通感覚というような意味をもった言葉でありました。それは自分だけの正しさを証明するひとつの基準であるのではなくて、自分が正しいと考えることを、他者の考えや認識あるいは感覚と照らし合わせながら、自分の考えをいわば相対化して周囲の人びとととともに生きようとする努力のプロセスでもあるのです。

じじつ新島も横田への手紙だけではなく、いろいろな人たちへの手紙のなかで、「良心」という言葉をよく使っています。そして、そこではしばしば「良心」という日本語にあえてカタカナでコンシャンスと書き、英語でconcience と書き込んでいたりしているのです。それは、新島が明らかに言葉の正確な意味、本来の意味で「良心」という理想を掲げていたことの証拠となるのではないでしょうか。

たとえば、新島が一八八〇（明治十三）年二月二十五日付で、卒業生で、東京で牧師としての活動を始めたばかりの小崎弘道に書き送った手紙では、

> かつ伝道の余暇あらば、少しの翻訳等成され候ては如何。今日些少の障碍または少しくコンシャンス〔concience 良心〕を傷むる等の事のために、国家の大鴻益（だいこうえき）となるべき伝道に損失を与えしむるの時にあらず。（『手紙』No.36）

と書いています。それは、「あなたがキリスト教を布教することにすこしの時間的余裕があるのなら、翻訳などをして多少の副収入を得る算段をしてはどうだろうか。いま、わずかな妨げや良心が傷つかないようにするために、この国にとって本当に必要なキリスト教の布教そのものを見失わないように」という助言でありました。ここで、新島が良心、コンシャンスと言うとき、「良心が傷つかないように」と言っているように読めますから、一見、あなたの信念が傷つかないように、という意味に理解できないことはありません。けれども、その傷は、小崎のキリスト教伝道によってこの国が得るであろう大きな利益と比べられているのです。より大きな、つまり、より社会性や他の人びととの共通性、あるいは公益性というべきかもしれませんが、それを大切にすべきだという視点が提示されている点で、新島は、良心という言葉をここでもより広い文脈で使っていることがわかります。

しかも新島の場合には、単純に共通認識や共通感覚というのとはすこしばかり意味が違っていました。共通認識とか共通感覚と申しますと、そこにはどうしても数の論理がつきまといます。多数決的な合意論といいますか、多数決は民主的ではあったとしても、ぎゃくに数量的な価値が理念に勝るイメージを払拭することはできません。

けれども、新島が共通認識とか共通感覚という意味で良心という言葉を使ったとき、そこには明確に、かれが聖書によって学んだ神との共通の感覚、神と共有される認識という意味が隠されていたはずでございます。

キリストによる自由

ここで、私はその新島の共通認識がどのような意味で神との間のものであり、どのような意味で神との共通感覚であったのかを考えておきたいと思います。たとえば、新島が国禁を犯してアメリカに渡って七年目のある出来事を通して、明確に知ることができるのではないかと考えてみました。

それは一八七二（明治五）年のことでした。その前年に日本を発った岩倉具視を代表とするいわゆる岩倉使節団が、アメリカにやってきたときのことでございます。岩倉使節団はアメリカ、ヨーロッパ各国を歴訪し、不平等条約解消の交渉と欧米の社会制度の調査を目的として派遣された使節団でありました。明治新政府は、岩倉使節団の調査報告によって、次々と欧米の優れた社会制度や教育制度を取り入れて、国家改革を実現していきました。いわば、近代日本の設計図を準備したのが岩倉使節団でありました。新島は、この使節団の通訳として、ほぼ一年にわたって、当時文部理事官という立場にあった田中不二麿とともに、各国の文部行政と教育制度を視察してまわったのでした。このときの体験は、新島のみならず、

のちの同志社にとっても大変に意味のあるものであったはずでした。
　当時、新島はアーモスト大学を卒業してアンドーヴァー神学校に在籍し、本格的に神学を学び、牧師となる準備をしていました。新政府からの依頼を受けた新島は、アンドーヴァーから首都ワシントンに出かけていきます。そこで、はじめて田中不二麿に出会うことになるのですが、そのときの様子を、アメリカでの新島の恩人ハーディー夫妻に宛てた手紙のなかで、新島はこんなふうに報告しています。抜粋して一部読んでみます。

　（他の）留学生たちは広間に入ってくると、理事官に対して日本風のおじぎ〔座礼〕をしました。私は彼らの後ろにいて、部屋の隅で胸を張って立ったままでいました。・・・私はこれまでボストンの友人たちに支援されて教育を受け、日本政府からはただの一銭も受け取っていないので、理事官は私を日本政府の下僕として扱う権利はないからです。
（『手紙』No.16）

　明治新政府の高官の前で、あなたには支配されない、私はあなたの使用人ではない、と誇らしく胸をはる青年新島の姿が目に眩しいように浮かんできます。新島は田中の教育事情視察のために、部下や配下という立場の者としてではなく、ひとりの自由人として契約を結び、力を尽くすことになりました。契約というのは、命令や服従ではなく、対等の関係で約束をした、という意味でございます。そして、そのことをやはりハーディー夫妻に宛てた同じ手紙のなかで、新島はさらにこのように書き継いでいるのです。そこも読んでみましょう。

　自分の権利を守り、その権利が認められたことをうれしく思います。どうかこの勝利の時をお二人も一緒に喜んでください。私は自由人、それもキリストによって自由にされた者なのですから。お二人の助力と援助のおかげでこの自由を獲得することができたのですから、お二人には感謝せざるを得ません。今、お二人の祈りは聞き入れられました。どうかこれからもお祈りください。私は人々が下す評価は気にしません。ただ、神に対して謙遜な子どもでありたいと願うだけです。
（『手紙』No.16）

　私はここに、新島の素直で伸びやかな気持ちがよく出ているのではないかと思います。ここで注目しておきたいのは、新島が自身のことを「キリストによって自由にされた者」と書いていることでございます。
　おそらくそのとき、新島の脳裏には、『新約聖書』にある

　この自由を得させるために、キリストはわたしたちを自由の身にしてくださったのです。だから、しっかりしなさい。奴隷の軛に二度とつながれてはなりません。
（ガラテヤの信徒への手紙　五章一節）

という言葉が意識されていたはずであります。それを確認できなくとも、私たちは新約聖書のこの言葉を新島の「キリストによって自由にされた者」というかれ自身の自己理解に重ねてみることによって、新島の手紙の意味をよりよく理解することができるかもしれません。
　つまり、新島が「良心」「コンショーンス」と言うとき、それは、キリストによって自由にされた者としての新島自身が、強く意識されていたはずでした。かれの共通認識、共通感覚にはいつもイエス・キリスト、そして神があったことを忘れてはならないのではないでしょうか。

ヤコブのように

　このように、新島は自身の経験を聖書の物語を引用しながら説明し、自分の心のなかをしっかりと見つめ、その意味を深く探りながら人生を歩んだ人でもありました。
　もうひとつ、その典型的な出来事をご紹介したいと思います。それは、一八七四（明治七）年の秋、十月九日のことでした。アメリカでの留学生活をほぼ終えた新島は、バーモント州ラットランドで開かれた会衆主義派教会の海外宣教団体であるアメリカン・ボードの第六十五回年次大会に出席をいたしました。新島は、その大会の最終日に新任の宣教師としての決意表明をするように求められていました。かれはこのとき、その場を借りて、日本にキリスト教主義の大学を設立しようとする決意を述べるべきかどうか、ずいぶんと悩みました。そして、さきほどお話しした留学中の後見人であったハーディー夫妻に相談をいたします。以下、新島が書き残した英文の手紙の一節を、これは岩波文庫版にはございませんで、『現代語で読む新島襄』にはございますので、そちらで読んでみます。

　・・・ハーディー氏は、半ばほほえみを浮かべながら実に優しい父親のような口調で、「ジョセフ、うまくいくかどうか私には疑わしく思えるが、やってごらん」と言われました。
　こうして同意がもらえたので私は所定の場所へ戻り、スピーチの準備をしました。心臓は高鳴り、入念に準備をすることなど全くできない状態でした。その時の私は、祈りの中であの哀れなヤコブのように神と取っ組み合い［創世記　三二・二三以下］をしていました。
（No.75「某氏への手紙」『現代語で読む新島襄』丸善、二〇〇〇年、二五〇ページ）

　これが新島の回想でございます。結局、この翌日のスピーチによって、かれは多くの支持者と理解者を得、約五千ドルの寄付金を集めて日本に帰ることになりました。このとき、帰りの汽車賃の二ドルを寄付したひとりの農夫があったことや、おなじように二ドルを、夫に先立たれた婦人が、多くのひとが去ったあとにそっと新島に手渡したことなどは、あまりにも有名です。後年、新島はこうして献げられた二ドルやこのときの五千ドルを「同志社の核」と呼んだことから、同志社では繰り返し語られるエピソードでありますけれども、私は、このとき新島が自身の胸のうちを「あの哀れなヤコブのように神と取っ組み合いをした」と述懐していることに注意を向けておきたいと思うのです。
　『旧約聖書』の「創世記」に登場いたしますヤコブというひとは、神と取っ組み合いの「すもう」をしたひととして、ふしぎな印象で語られています。若いときに、兄さんのエサウとなかば喧嘩別れをしたままになっていたヤコブは、のちに家庭を持ち、財産を蓄えて故郷に帰ろうといたしました。しかし、そのためには兄エサウと仲直りをしなければなりません。あるいは、兄エサウはひょっとして、ヤコブとの対決をと考えているのかもしれないのです。そんなヤコブの不安を象徴するように、かれの目の前にはヤボク川の急流が横たわり、この川を越えて向こう側にわたることが、その夜のヤコブの課題となりました。こちら側、つまり此岸の世界から、向こう側、つまり、その彼岸の世界へ、それはある意味で人生を旅する者の宗教的な内面世界を表しているように読むこともできます。
　創世記は「皆を導いて川を渡らせ、持ち物も渡してしまうと、ヤコブは独り後に残った」（三二章二四～二五節前半）と伝えています。若いときに、父や兄を出し抜くようにして生きてきたヤコブのことを思いますと、家族や一族、そして持ち物と一緒に川を渡り、ひとりあとに残ったヤコブの姿、その周到な配慮と気遣いは、かれの人間的成熟の結果であったと考えるべきなのかもしれません。困難な人生の経験は、ヤコブを周囲を思い遣ることのできる人間にと造り変えていたのかもしれません。
　ところが、そこで「そのとき、何者かが夜明けまでヤコブと格闘した」（三二章二五節後半）と書かれているのです。神を見る者はいない、と教えられている旧約聖書において、ヤコブが何者かと夜明けまで格闘した、というのはむしろ例外であり、異様な出来事でありました。すくなくとも、この格闘の最中に、ヤコブは相手が神であるとは気づいていなかったのです。
　三十歳を越えたばかりの青年新島が、大きな計画を胸に秘めて、その実現へと一歩を踏み出そうとしたとき、かれはヤコブのように何者かと格闘した、とそのときの悩みをふり返ったのでした。そして、新島はその何者かを明確に「神」という言葉に置き換えて「その時の私は、祈りの中であの哀れなヤコブのように神と取っ組み合いをしていました。」と、そのときの自身の心のなかをふり返っているのです。新島は、ラットランドでのスピーチにおいて、大学設立の計画を打ち明けるかどうか、その迷いと苦悩を、言わば、神との共通感覚のなかで経験した、というべきかもしれません。
　「創世記」には、

　ヤコブがペヌエルを過ぎたとき、太陽は彼の上に昇った。ヤコブは腿を痛めて足を引きずっていた。

（三二章三二節）

と書かれています。
　ヤコブはその格闘のあと、一夜明けると、その激しい取っ組み合いのために、腰を痛めて足を引きずることになりました。ですから、このとき、新島もまたヤコブのように何者かと格闘をしていたのだとしたら、そのときの新島の格闘、つまり神との格闘、神との共通体験は筆舌に尽くしがたい葛藤であり、悩みであったと考えてみなければなりません。
　先ほど読みました新島の手紙の日付は一八九〇年一月五日となっていますから、ラットランドでの出来事からすでに十五年も時間が経過していたことがわかります。それは四十七歳を目前にして亡くなった新島にとって、その死のわずかに十八日前の手紙であったことになります。新島はその格闘から十五年を経てもなお、そして、自らの死を直前にしてなお、そのときの悩みと苦しみ、神と格闘した若き日の自分を、かれの志の出発点として忘れ去ることができないでいたのでございました。
　先ほどの手紙のつづきをすこしだけ読んでおきたいと思います。

　次の日、壇上にあがった時、私は準備したスピーチをほとんど思い出すことが出来ませんでした。弁士としては哀れで未熟なものでした。しかし、一分後に私は自分を取り戻し、膝の震えもとまり、足もしっかりしました。新しい考えが心にひらめき、準備したスピーチと全く異なった話を始めました。
　スピーチそのものは全部で十五分もかからなかったでしょう。私は話している間、同胞に対する非常に強い感情に動かされ、彼らのために語るというよりもむしろ涙をたくさん流しました。
（『現代語で読む新島襄』同掲箇所）

　じつはこの手紙は、誰に宛てて書かれたものなのかわかっていません。しかし、新島の決断がどのようなものであったのか、よく伝わってまいります。

真理の囚人

　ところで、あのときは「神と取っ組み合っていた」と十五年も経ってから書き残した新島が、大胆なスピーチをし、日本に大学を設立するという無謀とも思える計画の一歩を踏み出すことができたのはなぜでしょうか。
　日頃、若いみなさんとお話ししておりますと、宗教というものにかなり似かよったイメージを持っておられるように感じるときがございます。似かよったイメージと申しますのは、

「宗教というものはその教えの通りに生きなければならない、だから、信仰をもって生きるのは不自由ではないか」という宗教への疑いです。もし、そうだといたしますと、新島の場合、明治新政府の高官の前で、「自分はひとりの自由人である」と胸を張ったり、そしてアメリカの教会から派遣される宣教師としての抱負や決意を表明すべき場で、当初の計画を変えて、日本でのキリスト教伝道の抱負をのべるよりも、キリスト教主義の大学設立を訴えたその大胆な行動は、どうして可能であったのでしょうか。

さきほど私は、新島の手紙にあった「キリストによって自由にされた者」という言葉を引用いたしました。これに関連して、新島はあるとき、説教の草稿を準備したメモのなかに、こんな忘れがたい言葉を書き残しています。それは、

真理ノ囚人コソ真ニ自由ノ人ナレ
（『全集』第２巻、四五一ページ）

という言葉です。この言葉は、「真理之囚人」という主題の説教原稿のメモに見ることができます。新島はここで、真理によって囚われているひと、真理の奴隷となった者こそ、ぎゃくにほんとうの自由のひとなのだと訴えているのです。それはじつに逆説的な自由であります。一見、奴隷のようでありながら、その主人が真理であるときにだけ、ひとは自由であることができる、というのです。

といたしますと、新島のあの大胆な行動、政府高官の前で胸を張れたことも、自分では思ってもいなかったスピーチができたことも、それによって、日本にキリスト教主義の大学を設立したいと願ったことも、じつは、この自由と関係があったのかもしれません。新島は、この自由を手に入れたい、いえ、この自由によって生きたいと願っていたからこそ、政府高官の権力にも、自分の小心な気持ちにも、そして無理かもしれないという絶望的な気持ちさえも支配されずに済んだのではなかったでしょうか。

自由であるということは、一面、正反対のようですが、むしろ真理に囚われている、真理によって奴隷とされている、真理に縛られている、そういうときにだけ、ひとは自由でいることができるというのです。こんなふうに考えた新島には、おそらく聖書に書き残されたイエスの言葉が大きな影響を与えたのかもしれません。『新約聖書』の「ヨハネによる福音書」です。

イエスは、御自分を信じたユダヤ人たちに言われた。「わたしの言葉にとどまるならば、あなたたちは本当にわたしの弟子である。あなたたちは真理を知り、真理はあなたたちを自由にする。」

（八章三一―三二節）

この聖書の言葉を読んでみますと、イエスは自分の言葉にとどまる者を弟子たちと呼んでいます。そして、今度は「弟子たち」というような三人称複数形ではなく、「あなたたち」というように二人称複数形に呼び変えて、真理はあなたたちを自由にするのだ、と訴えているのです。イエスの言葉にとどまる、と申しますのは、「隣人を愛し、あなたの敵をも愛しなさい」と語られたそのイエスの教えを大切にするという意味でございます。その愛の教えによってだけ、ひとはイエスに従うことができる。ぎゃくに申しますと、愛の教えを大切にすること以外に、イエスの弟子となることはできないということでもあります。そうすることで、ひとはイエスにとって「あなたたち」というお互いに向い合うような特別な、あるいは愛の関係のなかにおかれるのだというのです。その愛を知ったとき、その愛によってひとはさまざまな思い煩いから解放されて、自由になることができる。この箇所はそのように読むことができます。そうだといたしますと、真理とは、この愛を示し教えられたイエス・キリストご自身のことであったと考えることもできるのではないでしょうか。

明徳館正面の壁面には、この「真理はあなたたちを自由にする」という言葉がラテン語で《VERITAS LIBERABIT VOS》と刻まれているのをご存じでしょうか。つい先日、私は担当しております同志社大学のあるクラスでこのことを訊（き）いてみました。一〇〇以上の受講生がおられたのですが、知っていると答えた方はわずかにおひとりでした。せっかく、キャンパスのなかにそういう言葉があるのに残念に思いました。この言葉は、多くの大学でもスクールモットーのように掲げられています。が、有名なのは国立国会図書館東京本館の目録ホールかもしれません。そこには、日本語とギリシア語でこの言葉が刻まれていますが、なぜか、日本語では「あなたたち」ではなく、「われらを」となっています。国会図書館のホームページを見てみますと、国立国会図書館の設立にふかくかかわった歴史哲学の羽仁五郎のアイディアであったようです。ただ、ここで「あなたたちを」というのと「われらを」とするのとでは、意味は全く違います。「あなたたちを」というのは、いま申しましたように、明らかにイエスが愛を大切にして生きる人びとにたいして、その人びとをイエス自身が愛の関係のなかに招きいれて「あなたがた」と呼んでいたのです。いわば、そこには愛の二重性といいますか、その愛によって、あるいは愛にと招かれるイエスによって自由にされる、という考え方があります。ところがこの目的語を「われらを」にしてしまいますと、自由は私たちの努力によって得られものである、ということになります。そして、文脈からは、真理もまた図書館で膨大な書籍にアクセスするという努力によって獲得できるものというように、いわば対象化されていると考えられるのです。

もちろん、図書館という性格を考えればその読み替えの意味もよくわかります。ですが、同志社では本来の意味で、聖書の「真理はあなたたちを自由にする」という言葉を大切にしてきました。そして、何よりも、この言葉は新島の愛唱した聖句（聖書の言葉）でもありました。

神学部の本井康博先生は以前に、

新島こそ「自由ノ人」に憧れた「真理之囚人」であった。「自由ノ人」を産むために同志社は「真理ノ囚人」によって創建された。
（「新島襄の言葉」『同志社時報』No.106　一九九八年）

とお書きになったことがありましたが、まったくそのとおりだと思います。そして、新島は、その「自由ノ人」を生み出す同志社の文字通り「囚人」となって、生涯を同志社にささげた人でもあったのではないかと思えてまいります。

あこがれを圧束せずに

もう十年ほど前になるでしょうか。私は、機会があれば一度行ってみたいと願っておりました函館を訪ねることができました。函館に行ってみたいと考えておりました理由はいくつかありました。ですが、その大きな理由のひとつは、やはり函館は、新島が当時の国禁を犯して日本を脱出した場所であったからでした。函館で私を迎えてくれた友人たちは、そういう私の気持ちを察してくれて、夕方、空港に着くと、すぐに新島がベルリン号という船に乗り込んで密出国を企てた場所に案内してくれました。陽が落ちないうちに、という心遣いもあったと思います。いまは、そこは整備された港の一角になっておりまして、大きな倉庫の建ち並ぶ陰にひっそりと記念の碑と案内板だけが立っておりました。おそらく、私が同志社とかかわりをもたない者であったなら、見過ごしてしまいそうな平凡な景色です。しかし、私にとりましては、平凡な港の風景どころか、何度も写真などで見てきた懐かしく、そして、ながくあこがれてきた場所でありました。はじめての場所でありましたけれども、なんだかふるさとに帰ったような、というとオーバーかもしれませんが、もうすこしその場にいて、若い日の新島の気持ちを考えてみたい、そんな気持ちになっていました。

けれども、短い時間のなかで案内していただいたその場所で、もっと感動いたしましたことは、すでにあたりが暮れなずんで薄暗くなっておりましたその時刻に、二～三人の高校生ぐらいの若い人たちが、「あっ、ここだ！」というようにうれしそうな雰囲気で旅行案内らしき書物を片手にして、その石碑を取り囲む姿を目撃したことでした。そのとき、私ひとりであったなら、その若者たちに声をかけていたかもしれません。私と同じように、この場所にあこがれていた若い人たちがいた、それがそのときの私の感動でした。しかし、私はその場を案内してくれた友人たちへの遠慮もあって、その光景を十メートルほども離れたところから、しかも車の中から眺めたままで、その場をあとにせざるをえませんでした。

あれは初秋の頃のことであったかと思います。いまも私はあの函館の夕暮れに見た若者たち、新島が日本を出発したその場所を、ほんとうにうれしそうに、やっとあこがれの場所を見つけたという風情でたたずむ若い人たちの姿を忘れることができません。それは私にとりましては、とても印象深い光景でありました。

新島が函館からベルリン号の船底に隠れるようにして日本を飛び出したとき、かれは弱冠二十一歳の若者にすぎませんでした。多くの困難が予想され、その不安は想像すらできません。ですが、考えてみますと、同志社はひとりの青年の「あこがれ」からスタートした学校でした。あの函館の日以来、私は同志社女子大学で教員のひとりとして働くなかで、この「あこがれ」が大切なことを、なんども学生や卒業生のみなさんから学んでまいりました。私は、人間の能力にはそれほど大きな差はないのかもしれない、差があるとしたら、目標へのあこがれと、あきらめないのびやかな自由なのかもしれないと考えています。それは、私が若い学生のみなさんから教えられ、学んできたことでございます。

さきほど申しましたように、新島は、神奈川県大磯の百足屋という旅館に療養の目的で滞在しておりました一八九〇年一月二十三日、急性腹膜炎を起こして不帰のひととなりました。大学設立前の、それは無念の死というべきであったかもしれません。じつは、新島はいよいよ最期が近づいたとき、一月二十一日のことでありましたが、長い時間をかけて、これも教え子のひとりであり、当時新進気鋭のジャーナリストとして活躍をしていた徳富蘇峰に遺言を書きとらせています。口述筆記です。その遺言はどれも、後年に同志社の教育理念として広く知れ渡ることになる大切なものばかりでした。たとえば、そのなかには、「社員たるものハ生徒を鄭重ニ取扱ふ可き事」という言葉もあります。社員とは、同志社で働く者、教職員を指していますが、教職員は生徒を大切にしなければならない、というのです。当然のことかもしれません。けれども、私はそこにも、アメリカから送られた菊苗にも、「太陽がただ南より」あたるようにと細やかな配慮を見せた、新島の面目躍如といいますか、どこまでも生徒や学生を大切にしようとした、新島の祈りが感じられてならないのです。そして、その遺言には、これも同志社ではよく知られた遺言、あるいは新島の教育思想というべきかもしれませんが、

同志社ニ於てハ儻不羈なる書生を圧束せす務めて其の本性ニ従ひ之ヲ順導し以て天下の人物ヲ養成す可き事
（「同志社への遺言」一八九〇年一月二十一日　徳富猪一郎（蘇峰）筆記より）

という言葉が残されています。儻不羈とは、聞き慣れない言葉かもしれません。あるいはすぐに読めないかもしれない難しい漢字を書きます。常識を越えて抜きんでて独立心が強く、才気煥発（かんぱつ）な青年というような意味の言葉です。新島は、そういう学生を圧束せず、すなわち学校にとって都合のいい型枠にはめてしまわないで、その学生の本来の性格や能力を伸ばすように配慮することで、社会で活躍できる人物を育てて欲しい、と願ったのでした。それは同志社への遺言でありますが、いわば新島の祈りでありました。菊苗に、太陽がただ南よりあたるようにと配慮を見せた新島は、同志社の学生たちには、常識を越えた学生を常識の枠のなかに閉じ込めないで欲しい、と願ったのでした。

きょう冒頭で、私自身のことをすこしお話をいたしました。私は神学部を卒業してしばらく東京の教会で伝道師・牧師として過ごしましたが、その教会は、新島のあと同志社の校長として責任を負った小崎弘道とかれの仲間たちによって設立された霊南坂教会とよばれる教会でございました。小崎については、先ほど「良心」について申しあげたとき、新島が良心をコンショーンスというカタカナで並記した手紙を書いた相手と申しあげました。いわゆる熊本バンドの出身で優秀な同志社第一回卒業生の一人でありました。

私がおりましたとき、ちょうど古い礼拝堂を取り壊して新しい礼拝堂を建築しようとしていたのですが、それはまだ古い礼拝堂でのことでした。私は、礼拝堂の玄関に掲げられた木

製の板に直接「輪郭打破」という四文字が墨痕も鮮やかに書かれていたことを忘れることができません。牧師であった小崎自身の筆で書かれた大きな額でした。それは、小崎が大切にし、折に触れて教会の信者の方たちに語ってきた言葉でありました。私は、毎日この「輪郭打破」という言葉をあたりまえのように眺めながら、そのうちに、なんとなくこの言葉に見張られているような気持ちになったものです。

それは、輪郭、すなわち枠組みといいますか、外観とか形式、あるいは見た感じやイメージ、そういうものに表象化されたものへの固定的思い込みということだろうと思いますが、その輪郭を打破する、打ち破るというような意味だろうと思います。

小崎はこの言葉に何を託したのでしょうか。ひとつは、幕藩体制の崩壊期に武士の家庭に生まれ、儒教的な教養のなかに育った小崎にとって、新しい日本社会の建設とその時代を生きる小崎自身の思想のあり方の問題であったような気がします。つまり、新しい時代をたえず固定化しがちな自分自身の精神のあり方をも含めて、若い日に出合ったキリスト教の考え方によって、打ち破りつづけようとしたのではなかったろうかと思うのです。

そして、ふたつ目はまさに、新島が残した儻不羈という考え方に関係してきます。小崎は新島が遺言した儻不羈をこの輪郭打破という言葉に焼き直したのです。じつは、先ほどの新島の遺言が口述筆記されたとき、小崎も新島の枕頭にいて、立ち会っていたのでした。新島は「儻不羈なる書生を圧束せす」と、学生にたいしての配慮を求めました。しかし、儻不羈は周囲から見た人物評価という性格をもっている言葉です。ですから、小崎はそれを自らを戒める言葉として輪郭打破と言い換えたのではないかと思います。

若き日の新島が、遠い海の向こうの社会とその社会を成り立たせている制度や文化、そしてそれらをささえる精神にあこがれ、それを知りたいとアメリカに渡ったように、同志社では、そういう規格外れの学生が大切にされなければならない、そういう学生にこそ、「太陽がただ南より」あたるように、そのあこがれを圧束しないように配慮すること、それが新島の祈りでありました。それは、教育者としての祈りであり、牧師としての祈りであり、なによりも、キリストによって自由にされた者の祈りでありました。それは、ただ真理の囚人としての、そして、未だ見ぬ世界にあこがれる若者に囚われたひととしての祈りであったように思われてならないのです。

きょう「新島襄の祈り」ということでお話してまいりましたが、卒業生のひとりとしてまた教員のひとりとして、気がつけば、さまざまな機会に新島の手紙や言葉、その残された思想、あるいは信仰によって、私自身がどれほど励まされてきたかしれません。一見、平板に見える出来事の奥に、豊かな心の世界が隠れていることも、新島によって教えられてきたような気がいたします。若いみなさんが同志社で育っていくことの多くの感動も、新島に手を引かれるようにして、味わってまいりました。きょうは、そうしたことの一端でもみなさんにお伝えすることができれば、と願いながら私の拙いお話を終えたいと思います。

ここまでご清聴いただきましたことを心から感謝いたします。

二〇〇八年十一月六日　同志社スピリット・ウィーク「講演」記録